

令和元年度卒業式辞

「春風や鬪志いだきて丘に立つ」

ここ大野の里にも、希望に満ちた季節が巡ってまいりました。本日は保護者の皆様のご臨席を賜り、いわき市立大野中学校第七十三回卒業証書授与式を挙行できますことに心より感謝申し上げます。

さて、ふるさとのあたたかさに生まれ、新しい世界へ踏み出そうとする十二名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。人としての温かさと親しみやすさを感じられた皆さんは後輩たちからも慕われる一方で、生徒会活動や部活動などでは頼もしいリーダーシップを発揮してくれました。特に十月の御城祭では、普段は見せることのない役者ぶりを発揮し、見る者を楽しませてくれました。その企画や表現の陰には、人知れぬ苦労があったものと聞いております。同学年の仲間が少なく、様々な苦労が絶えなかった小・中学校時代だったかもしれませんが、大きな集団に埋もれることなく育むことができた力を生かして、これからも半歩ずつでも前に進んでいってください。

いつの時代にあっても、一定の学業を終えたその先は五里霧中です。しかもその霧は、時代ごとの濃さがあります。とりわけ現在の日本社会では、人口減少のように確実に来る未来と、職業一つとってもこの先どうなるか確たることが言えない、そんな不確かな未来とがひどく錯綜しています。未来はけっして明るくない。そんな気分が充満する中でも、ここ大野で培った「底力」はきっと頼りになるはずです。そして、いざ病気や事故や災害などによって独りの力では生きていけなくなったときに、助けてもらえる人をいつでも集められるよう、普段から人とのネットワークを作っておく、そのような力をぜひ身に付けてください。

そして皆さんの行く手には、これからも様々な苦労や困難が待っています。できればそれらを避けたいという思いが働くのは、無理ありません。しかし、苦労を苦労としてそのまま引き受けることの中にこそ、人として生きることの意味が埋もれていると私は考えます。

苦労は時によって、独りで背負い切れるほど小さなものではありません。人と支え合うこと、人と応じ合うことがどうしても必要になります。そのような他の人たちとの関わりの中でこそ、「自分とは何か」という問いの答えが浮かび上がり、家庭や社会で自分が果たしうる小さな「役割」を考え直すことができるでしょう。

卒業生の皆さんは、これまでの経験や育んできた個性らしきものに閉じこもることなく、自ら行動を起こして他者と関わり合い、新たな世界と出会い、そこで世界からの声に耳を傾け、自分が存在することの意味を探りながら生きていってください。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。皆様からいただきました本校教育活動に対するご理解とご協力に改めて感謝申し上げます。

結びに、卒業生の皆さんが、社会においても、自身の人生においても、リーダーシップのとれる大人になることを期待するとともに、心身共に健康な人生を送られるよう祈念し、式辞といたします。